鹿兒島觀光叢書

第三輯

薩摩義士の話

鹿兒島市鄉土課

納本

特233
272

始

特 233
272

帝國圖書館藏

薩摩義士の話

大正十一.二.一五 帝圖

總奉行平田靫負正輔

総奉行の誕生地

（鹿児島市平ノ町上ノ平通にあります）

油島締切築堤

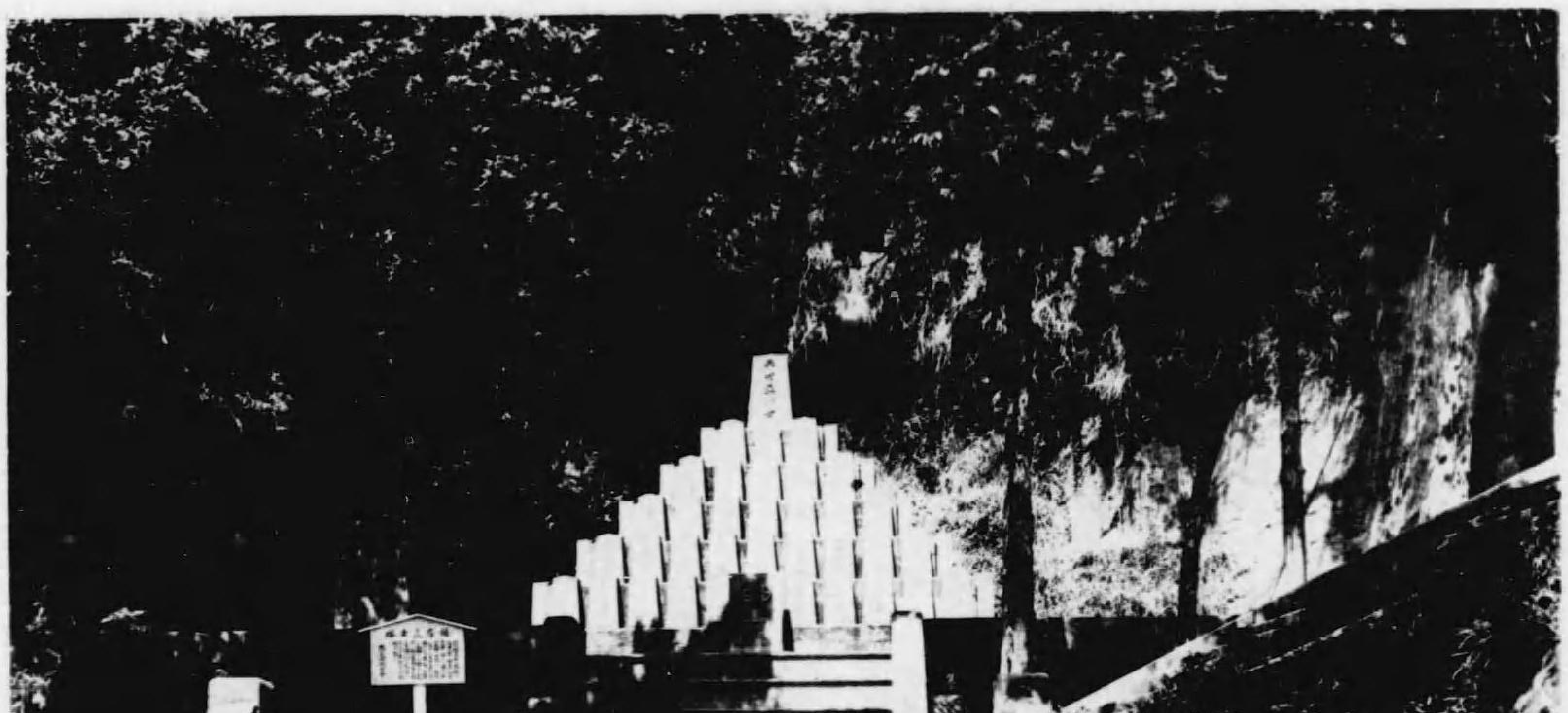
（最大難工事油島千本松の築堤であります。向ふに見える山が多度山で、圖には見えませんが、松林の右の方に治水神社と、寶暦治水碑があります。黒松秀志氏筆）

寶暦治水碑

（岐阜縣海津郡大江村油島締切築堤に建てゝあります）

重年公と義士の忠霊を祀る治水神社

（油島締切築堤に鎮座）



薩摩義士弔魂碑

（鹿児島市城山の麓にあります）

五百萬両の藩債を整理し、更に五十萬両を貯蓄した薩藩唯一の財政家であります。

調所笑左衛門廣郷

はしがき

旅の人ならば氣にもかけずに往つてしまふであらう。土地の者でも深くは識らない。しかし大切な事柄であるといふやうな材料を、郷土のあちこちから蒐めて來て、それを克く觀察し、ごく解りやすい「話」にまとめ上げたならば、一種の面白い寧ろ徹底した觀光案內書が出來るのではないか、といふところから生れ出たのがこの鹿兒島觀光叢書である。

各輯を通じて、あらゆる方面から「鹿兒島」をより深く認識して戴けるならば、洵に幸である。

第三輯「薩摩義士の話」は斯の如き望みに依り國史研究家鹿兒島市主事　市立歷史館長平川淸高氏の執筆に成つたものである。平川館長は、先きに大正十年九月、近くは昭和九年十二月、薩摩義士の事蹟を著し、其の間屢々現地を視察して、普く事蹟を訪ねて調査し其の所懷を記述せられたもので、會心の著と信ずるものである。茲に記して衷心感謝の意を表する次第である。

昭和十七年五月上浣

鹿兒島市鄉土課

稿者のことば

薩摩義士の事蹟は、聞くも涙、語るも涙。實に忠義天日を貫き、至誠鬼神を泣かしむるものがあります。

若し心なき旅の人が、治水神社に參拜いたしますならば、神前に紺碧の木曾、揖斐、長良の水を眺め、養老、伊吹、多度の秀峰を仰ぎ、綠滴る千本松に颯々の音を聞きます時俗腸を洗ふに足るとでも云ひませうか。

しかし私は幾度か此の神社に參拜して、往時を偲び感慨無量、忠烈なる犠牲に心からなる默禱を捧げ、忠靈に額づいたのであります。

木曾川の堤を築いた薩摩義士の精神が、大東亞を築く精神と思ひます。

かの眞珠灣頭、黑暗々の海底を、從容として一死突入した九軍神も、亦同じ精神を以て大和魂の華と散つた方々であります。若し此の小冊子によつて、大東亞戰下精神作興に資するところがありますならば、獨り稿者の幸のみに止まらないでありませう。

昭和十七年五月廿五日薩摩義士記念日に稿者平川清高識す。

薩摩義士の話

目次

第一　伊勢海に注ぐ昔の三大川……一
第二　輪中の話……二
第三　大洪水……三
第四　工事命令島津家に下る……九
第五　鹿兒島城にて誓ふ決意……一三
第六　散るは涙か將露か……一八
第七　美濃地に着く……二一
第八　工事の方針を定む……二五
第九　辛い材料集め……二七
第十　難工事重なる洗堰と油島の締切……三〇
第十一　斯の堤は君が肉　此の川は血……三四

第十二　恨は深し油島の割腹……三七
第十三　恨重なる洗堰の悲壯……四〇
第十四　悲憤におのゝく一之手の逆川堤……四三
第十五　繰り返す涙の生活……四九
第十六　さすがに大願成就……五二
第十七　藩士達國に歸る……五六
第十八　總奉行平田靭負正輔の最後……五八
第十九　伊集院十藏久東の工事報告……六一
第二十　負債にからむ秩父崩……六三
第二十一　齊興公調所笑左衞門廣鄉を登用せらる……六五
第二十二　明治維新……六八
第二十三　義士の墓……六九
第二十四　祭文……七五

薩摩義士の話

第一　伊勢海に注ぐ昔の三大川

伊勢は津でもつ、津は伊勢でもつと歌はれる伊勢の國と、尾張名古屋は城でもつと歌ふ尾張の國と、孝子の名で知られて居る美濃の養老瀧は又よく歌はれて居りますが、此の三つの國の境をなして伊勢の海に注ぐ主なる川を、木曾川、長良川、揖斐川といひます。

この三大川は、今こそ濃美の大平野を養ふ大切な川でありますが、今から數百年前の三大川は、川筋が網の目の樣に小さく分れ、其の上堤防は見る影もない粗末なもので、大雨毎に起る洪水は、沿岸二百幾十村の住民を苦しめたものでありました。

しかも洪水は、雪解けの頃から、梅雨、それから時ならぬ秋の雨などで、殆ど毎年起るので、住民たちは泣くにも泣けぬ悲しみのどん底に陷る氣の毒な人々でありました。

第二　輪中の話

住民たちは、何んとかして此の水害を防ぎたいと、一生懸命になつて方法を見つけました。ところがその頃は治水工事に關する知識があまりありませんので、みんなで考へついたのが輪中であります。大きな川、小さな川で圍まれてゐる網の一目毎に、其の住民が、力を合せて、其の周りへ輪形の堤防を築いたのでありますが、漸くこれで洪水が防げることもありました。それからいつとはなしに、これを輪中といふ様になりました。

此の輪中は網の目の大小によつて築かれたものですから、まち〳〵で一樣ではありません、五明輪中は小さい方で周りの堤がたつた四粁(一里)ですが、あの大垣城で名高い大垣輪中などは周りの堤が四十粁(十里)もあり、堤の一番下敷の最も廣いところが百米(五六十間)、堤の上が、十米(五六間)もあつて最も大きい中であります。

輪中は住民の生命も財産もみんな大事に護つてくれるたつた一つの賴み所であります。

それで輪中の堤防は年々大事に修築工事が加へられたのであります。何んと云つても殆ど毎年の洪水で川床が高くなるので、堤の高さも、それと並んで高くせねばならなかつたのであります。

第三　大洪水

天正十四年(三百四十八年前)といへば豐臣秀吉が、殆ど天下を統一して、殘るは西國で一番大勢力のある島津氏のみでありますが、此の年の六月、大洪水があつて、其の時木曾川、揖斐川の水嵩はだん〳〵増して六米(二丈)を越へ、輪中の堤を破つた個所が百八個所に及び輪中の殆ど全部が水の底となり、人も馬も牛も犬も鷄も、田も畠も、何んでも一呑みにして、木曾川は遂に瀬筋を變へてしまひました。

洪水の歴史を調べますと、此の天正十四年六月の大洪水から、寶暦三年七月の大洪水迄百六十五年間に、大の字のつく洪水に見舞はれたのが、九十二回に及んで居ります。

輪中の住民達は生きた氣持ちもなく、將來のくらしの途さへ失ふやうになり、不安は愈々重つて來ますので、困り切つて遂に、江戸幕府に度々治水工事を願つたのでありますが

幕府の方ではあまりにも大工事であるので、着手せなかつたのであります。私は今こゝに其の恐ろしい恐ろしい最後の大洪水の模様を今迄に發行された書物の中から、ごく分り易いところを述べることに致します。

昭和十七年から百八十八年前は、寶暦三年であります。此の年の七月の末頃から、美濃尾張、伊勢の廣い平野に、明けても暮れても物凄い大雨の日が續きました。木曾川も揖斐川も、長良川の水量も、またゝく間に幾倍となり、幾十倍となつて、どう／＼と渦巻く濁流は、世の中の凡てのものを呑み盡さねばやまぬと云ふやうな勢ひとなりました。

「おう恐ろしいことだ。今夜中降り續いたら、どうせ助かる譯には行かないだらう」

「さうだとも、だが然し、この空模様ぢや今日や明日には晴れそうには見えぬ何んと情けないことであらう」

二百幾十ケ村の村人等は、空を仰いで、悲しみ嘆き、涙に暮れ、心にしつかりと、神樣や佛樣を念じて居りました。村人の心も知らず、意地の惡い雨はやみさうにも見えません雲は低く垂れ黒く重り合つてだん／＼けはしくなり、篠つく雨に强い風さへ加はつて來るのでした。

人々は生きた心地もいたしませぬ。血の氣も通つて居りませぬ。

「隣村では堤防が切れたといふ大騷ぎだ」

「向ふ岸ぢや、堤防の上を平越に水が這入つたさうぢや」

誰からともなく、こんな叫び聲が聞こへだすと、村々の驚きとおそれとはまた一段と高まつてまゐりました。

「あゝ大變だ、一本撥の太鼓が鳴るぢやないか、愚圖愚圖しては居られないぞ」

「それつ、お寺の半鐘を撞き出した、命の惜しいものは遁げろ、早う遁げろつ」

泣く、叫ぶ、喚めく、一家一族親類縁者、互に手に手を取り合つて、命から／＼山手の方へ避難いたしました。運惡く遁げ遲れて死んだものも數へ切れないほどでありました。

斯した大洪水の跡は實にむごたらしい有樣でありました。田や畑の作物はいふに及ばず

家財道具も、家も、藏も、みんな押し流されてしまつて、見渡す限り一面の泥海となつてゐました。

歸つてきた村人は、この有様を眺めて、

「あゝ今年も、一粒のお米さへとれなくなつた、住むに家もなく、喰べるものもない」

「こんな土地は人間の住むところではない、他所へ行け、他國へ行かうぢやないか」

こう云ふことで、五人減り、十人去り、その村々の人影は薄れ、從つてその土地は益々荒れ果てゝ、次第次第にさびれすたつて行くのでありました。それも其の筈、この樣な大洪水が殆ど毎年續いてあつたものですから、誰だつて辛抱の仕切れなくなるのも無理ではありませぬ。

一體此の地方は、大昔は伊勢海續きの大海原であつたさうです、それが木曾や、長良や揖斐川が其の川上から、土や砂を流して來て、永い間かゝつて、陸地を拵へ上げたもので大抵川床よりも陸地の方が低く、水害にはお誂向の土地でありました。

そこで村々の人が寄り集つて、いろ／＼と善後策について相談いたしましたが、この水害を防ぐには、完全なる川普請をしなくてはならぬ。それには澤山のお金と、力が必要でありまして貧乏な村々に出來る筈はありませぬ。たゞこの上は將軍家にお縋りして助けていたゞくより他に途はないと、遂に江戸幕府に向つてこれが嘆願書を差し出しました。幕府でもいろ／＼其の有樣を調査いたしましたが、なる程、その村々の困難ばかりでなく、國家の上から見ても、捨て置くことの出來ないものとして、快くおとり上げになりました千古に朽ちぬ、忠臣義士の譽も高き、薩摩義士の血と肉との奮鬪、魂の物語りは實にこれに其の端を發したものであります。

今私はこゝ迄書きつゞける中に、まざ／＼と思ひ出されるのは數年前大隅半島を襲ふたあの大暴風雨の悲慘の有樣であります。私は直接の經驗はありませぬが、洪水後の跡を視察して又其の時のお話を聽き或は鹿兒島縣廳から發行された暴風水害誌を見て幾多の寫眞を見て、今尙ほゾッとするのであります。實際行つて見ますと山々は其の頂から刷れて山

の骨が見へるし、

恐れ多くも明治七年七月十日明治天皇太政官布告を以て御治定の神代の御陵、神武天皇御父尊鸕鷀草葺不合尊鎭ります吾平山上陵附近一帶の荒れ果てし樣を見ては、餘りの恐懼に涙ぐまずには居れませんでした。

山陵の若葉にそゝぐわが涙

今かうしたことを思ひつゞけ乍ら、あの三大川の流域が殆ど毎年かうした慘害に逢つては、迚も人間の住むところと思はれなかつたことが想像されるところであります。

私は木曾川治水工事に關しては、其の實地視察として大正十三年八月、鹿兒島日報社の前身鹿兒島新聞社の主催で時の鹿兒島市助役上野篤氏（後の上野市長）等に從つて各方面を實地に見聞してから、屢々この地を訪れて治水神社に參拜義士の忠靈に額き、其の跡を弔ひましたので、一入筆をとる中にも、あの川、あの堤、あの神社、あのお寺、あの墓の一つ一つも目の前に現はれて參ります。

第四　工事命令島津家に下る

幕府に嘆願致しても一向らちがあきませんので、遂に直訴が起りました。直訴といへば佐倉宗五郎を思ひ出す人もありませう。しかしそれは後にお話致します薩摩義士の最大難工事であつたところの金廻輪中油島新田の志士加藤傳藏であります。

直訴狀の原文は大体次のやうな意味であります。

「毎年毎年の水害で農民はみんな悲しみのどん底にあへいで居ります。其の絕えて望みのない憤りから何時暴動を起すかも知れない。此の眞に憐れな農民の窮狀を救ふのには三大川の治水工事を完成するより他に途はありません。此の旨將軍へ御懇願下される樣に」との意味を細々と記したものでありました。又、美濃國多藝郡下笠村庄屋七里孫右衞門は三大川御普請のことを請願するといつて江戸表まで上つて行きました。あつちにもこつちにも、かうして哀訴の民の聲が起つたので幕府に聞こえぬ筈はありません。とう〳〵御手傳普請の命令は降りました。

九代將軍徳川家重は、美濃、伊勢、尾張一帶の水害の大なるに思ひを致し、寶暦三年十二月二十五日、薩摩藩主第二十四代の若き殿様島津重年公に、三大川治水工事御手傳普請を命じました。其の文面には次の様な意味が記されてありました。

「美濃、伊勢、尾張の川々の御普請の御手傳ひを仰付けられましたから、其の旨をうけて工事を完成致される様に。尤も此の爲めにわざ〳〵江戸表へ參上して御挨拶などするには及びません」恐々謹言

十二月二十五日

西尾隱岐守　忠　尙　判

松平左近將監　武　元　判

本田伯耆守　正　詮　判

酒井左衛門尉　忠　壽　判

堀田相模守　正　亮　判

松平薩摩守殿

かうした書きつけでありました。これを江戸芝の薩藩邸へ西尾隱岐守忠尙の名で傳達致しました。

こんな無暴な無慈悲な仕打が何處にありませう。何の關係もない遠い遠い西國の果ての薩摩藩に命じたのは、天下の大名小名が、甚だ注目し、世間の誰でも不思議に思つたのも無理はありません。

それといふのも誰でも考へて下さい。水害地は殆ど江戸幕府の直支配地であります。而も徳川御三家の筆頭尾張侯が其所に居りますし、併せて戸田侯は大垣に松平侯は高須にありながら、様々な口實をつくつて關係地方の大小名も農民も年々の被害に疲れ切つて、どう考へても工事に着手する餘力は無いとして、迷惑至極にも薩摩藩に命じたことは、考へさせられることが數々あるのであります。

外様大名の總大將、徳川氏の目の上の瘤を何んとかして、息のねを止めようと考へて居る幕府の魂膽が思はれるではありませんか。人間業では出來ないとみんなが考へる難工事幾百千萬兩を費すとも見當のつかぬ大工事、富と力の限りを盡しても迚も出來ないと噂される難工の數々で、これを命ぜられた島津家は常に藩の興廢の瀬戸ぎわに立つことになりました。

いろ／＼考へて見ますと、何んといつても、此の治水工事は順序として尾張義直侯が引受けるのが當前であります。昔にさかのぼつて考へて見ますと、織田豐臣の頃即ち安土桃山時代頃まではそれ程大洪水はなかつたのでありますが、徳川御三家の義直侯が尾張城主となつてからは、その領地の境界に極めて堅固な大堤防を築いたのであります。其の爲めに、尾張は水害をまぬかれましたが、反對に美濃や伊勢は、目も當てられぬ洪水をまともに受けることになりました。かう考へますと、何はともあれ、尾張侯が川普請をなすのは當前すぎる程の當前でありますのに、山川幾百里遠くはなれたところの九州の南、島津公に只奉書紙一枚の墨付きで命令したとは、よく／＼も、幕府の仕打ちが想像されます。

思へば島津家は、關ヶ原の役に、徳川の本陣を突破した豪勇無雙の義弘公に其の膽を冷されてからは、常に恐れをなしたのであります。世間でいふやうに「薩摩に馬鹿殿なし」の如く名君賢臣相繼ぎ、島津家は磐石の固さを加へてゐますので、此の川普請で、うんと金銀を使はせて、かうしたことからして、又と浮ばれぬ様にとのはからひであつたことは誰でもうなづかれるところであります。

第五　鹿兒島城にて誓ふ決意

寶暦三年も夢の間に過ぎて、目出度い寶暦四年の元旦を迎へた鹿兒島城下町は、上下みんな屠蘇酒に「やあお目出度う、お目出度う、年内はいろ〳〵御世話になりました。どうぞ本年も相變らずどうぞ宜敷御賴み致します」と交はす年頭の挨拶も嬉しさに包れて五社詣りも賑やかに行はれました。喜びに滿ちた、明くる二日の正午頃、川普請の命が下るとは、神ならぬ身の誰しも知るよしがなかつたのであります。

城內では年初の喜びを交はしてゐる最中、

早籠。意外千萬。何かの一大事と思はれる。扨て何事だらうと主從或る不安に襲はれたのは、まことにさうであつたでせう。

江戸藩邸の早籠からは、直ちに木曾揖斐長良三大川の、治水工事が傳へられましたので城中の面々の緊張は正月の氣分を吹つとばして、俄に大廣間に城中會議がひらかれましたさあ大變、思はぬ幕府の命令に、人知れず悲憤の涙を吞む者もあつた。何んといふ無禮のなことであらう。島津家を亡きものにしようとのたくらみだ。よしみんな一死洵藩の最後の時が來たと、血走り怒りに怒り立ち奥齒をじつと嚙んでゐます。當年二十六歳である重年公も、若武者に凛たる其の雄々しい姿に、決意の程も現はれて、主從一同其の憎い仕打ちに、夫々斷の覺悟が決められました。きつと幕府と一戰するぞ、君の馬前には、おれが眞先きに死のう。といきり立つたのも無理からぬことであります。

此の時、又一方に於ては、江戸に於て既に命を受けて居るからお家の爲めに、これは何が何んでもやり拔くがよいと、極めて平和の中にと述べる向きもありました。忍ぶべきは忍び耐へ得る限り耐へてこれを飽く迄やり遂げるが眞の薩摩武士だと熱誠あふれて說く人もありました。血氣盛りの人達は非戰論者に腰拔武士はどうも困つたと笑ひ、自重した人達はお家浮沈の大事だ、小勇に走つてはならぬと云ひ、互に讓り兼ねる樣でありました。

先刻からだまつて聽いて居た家老平田靱負正輔は、みんなの意見が充分に交はされた頃を見計つて、物優しく靜かな聲で、工事をお受けするといふ方の意見も、又幕府と一戰しようといふ考へ方も、共に御家を思ふ至誠の發露であつて、ごもつともと思はれます。只

此でしつかり考へねばならぬ事は、我が大日本は大君の治め給ふ國でありまして、我等の祖先は遠い〳〵昔から大君に忠勤を勵んでゐます。此處を思はねばなりませぬ。さうすれば今度の川普請は幕府の命令とは云へ、政治は朝廷の御指圖によつて行ふて居りますから、つまり、我が皇土と皇民を救ふことになります。實に尊い大事業で、皇國民として奉公の誠を捧げなければならぬと。日頃の覺悟を明かにしました。

さすがに家老として重きをなしてゐた平田靱負正輔の此の一言を聽いたみんなの人達ははつきり目がさめた樣に異口同音に賛成して、なる程、さう考へるとこれは命にかけて完成せねばならぬ名譽とさへ思つたのであります。神代以來誠忠をぬきんでた薩摩隼人の傳統の美風は發揮されまして、天下の大工事を請合ふことに決つて城中會議は終りを告げました。

幕府の惡謀に涙を呑みながら、皇國のみ民われ等は愈々盡すべき時が來たと靱負は、勇み立つて從事することになりました。勿論工事總奉行には家老平田靱負正輔と決りました

副奉行には大目付伊集院十藏久東が任命せられ、用人堀堀右衞門貞紀をはじめとして四十餘名が命を拜し、江戸表の方からは、徒士(かちざむらい)、足輕等多數參じまして、總勢壹千名近くになりました。

重年公は力と賴む靱負を側近くお召しになつて、御手づから小刀を渡して、君臣の情こまやかに、涙をたゝへて、

「靱負、この工事は强敵の大軍を討つより難儀だと考へる。然しながら成就せない時は島津家の恥と共に興廢のわかれるところだ。自分は死して天下に謝せねばならぬのである賴むぞ賴む。此の小刀こそ自分の身がはりであるぞ。何事もこらへ士卒を勵まして、芽出度成就してくれることを待つてゐるぞ」

と仰せられましたので、靱負は涙に顏も上げ得なかつたのでありますが、はつと姿勢を正して、

洵に此の上もない有難い勿體ない御下命を戴き、靱負の面目これに過ぐるものはありま

せん。必ず仰せを守りまして、身命をなげうつて、きつと成し遂げます」と、凛たる決心を誓ひました。

靱負は既に胸の中に決するところがありました。必ず必ず、如何なることがあつても成し遂げる決心がはつきりして居つたのであります。

第六　散るは涙か將露か

出發も間近くなつた或る朝、靱負は今を盛りと庭に咲き香ふ梅の下に、わが子千代松を呼んで、

「千代松お前も既に十歳の春をむかへた。能く我が訓誡を聞くがよい、少しは聞き知つてゐるであらうが、この度の川普請は實にお家の一大事と思つてゐる。よしそれが幸に成功しても、父の命はなきものと覺悟せよ、父亡き後は文武の道に心掛けて、忠勤をはげみゆめゆめ家名を汚すことあつてはならぬぞ」と懇ろに說きさとす聲はさすがに曇つて居りました。

さすがに千代松は父の顔を見上げながら、

「武士の命は主君に捧げたものと承知いたして居ります、しかし父上樣、幸にして其の川普請が成功しましたならば歸つて下さい。どうぞ歸つて下さい」と申しました。

聞いて居つた靱負は胸も張り裂けるばかりでありましたでせう。

涙をやつとおさへて、

今度の出發は戰爭に出かけると同じことで、否それよりも困難と思ふが、武士は雪の中に咲く梅よりも、散り際のよい櫻のやうに、死すべき時に死んでこそ、武士となるのぢやと聲をはげまして云ひきかせました。

千代松は父の下に兩手をついて

「父上何卒お許し下さいませ、御教訓は肝に銘じました。

「わかつた。さすがに靱負の子ぢや…………」

親子今生の生別又兼ぬ死別で、靱負も思はず千代松の手をとつて熱いものが流れて居ま

した。

向ふの樹蔭にぢつと此の様を見て居た妻の静枝は、遂にこらへ切れずに、御主人様と云ひつゝ、其の場によゝと泣き伏しました。

靱負は、きつとして、お前武士の妻にも似合はぬ様ぢやないか。泣くな、愚かにも程がある」と思ひを胸にをさめて叱りつけました。

静枝は、それでもあまり悲しうございます……」とむせび泣いてゐましたが、此の時靱負は

「一天萬乘の大君のために、命を捨てゝ天下の工事をなすは、武士の本望である。幕府の命令ではあるが、大君の土地、大君の御民を救ひ、又してお家の大事を成就するのだから、これより芽出度いことはない。いざ祝へ、いざ祝へ、お前の涙は嬉しさ有難さの涙と思ふ。正しくさうであらう」

千代松は

「母上様ほんとに其の通りですよ」と哀惜の情、互に胸に充ち充ちて、悲壮な別離の場面が、ひろげられました。

こんな悲しみは美濃へ急ぐどこの家でも行はれましたが、中にも音方貞淵の母は出發の前夜自害して、我が子を勵ましたといふ美談が、傳へられて居ります。四方の海、波静かなる大八洲に、只薩摩藩のみが、こんな悲壮なことになつてしまひました。

第七　美濃地に着く

頃は正月二十九日の明け方のことであります。平田正輔、伊集院久東等の一行は鹿児島城内の大廣場に整列し、藩主重年公より渥い激勵の言葉を賜はり、死を以て工事成功の誓ひを述べました。藩士は勿論みんな城下の人達數萬人の見送りを受け、生きて還れぬなつかしの鹿児島を後に出發いたしました。何日か歩きつゞけて小倉に出ました。そこから船に乗つて大阪に上陸し、そこで大阪京都の薩藩邸留守居役等と談合の上、國産を抵當としてお金方から三十萬兩といふ工事費を借り受けました。三十萬兩と申しまするると、當時の

お米に換算して實に百二十萬俵に相當したものださうで、隨分大したものでありました。

一行は潤二月九日無事美濃國大牧村に到着しました。正月二十一日江戸表を發足した山澤小左衛門盛福、川上彦九郎親英等もこれと相前後して同所に着きました。そこで同村の富豪鬼頭兵内方を本部として、總副奉行以下重役等は此處に在つて工事全體の指揮をとり石田村、金廻村、太田村、大藪村の四ヶ所に出張所を設け、中村與太夫種暁、肥後八右衛門盛望、中村八兵衛種香、土岐市左衛門賀光、土岐治郎八常房等以下これに分屬して直接工事の監督に當り、その他徒士足輕等は、工事地の状況によつて、此處彼處の民家に分宿させることゝいたしました。

その翌くる日、靱負は一同を伴れて多度山の麓に鎭座まします多度神社に參拜し、工事成功の祈願を上げ、その席上に於て、普請中藩士の心得ねばならぬ事項を申しこれを誓ひましたが、悲壯限りないものでありました。

一、身命を賭して工事の竣成を期すること。

一、幕府方出張役人に對しては、禮儀を厚くし、如何なる事情があつてもこれに逆はず堪忍を第一とすること。

一、住民に向つては温良且つ親切にして、かり初にも粗暴の振舞など絶對に愼しむべきこと。

この信條を遵守すべきことを諭し、尙ほ神に誓はしめました。

また村々の名主、年寄、惣代等を招きよせまして、止宿村々申渡書なるものを提出せしめ、藩士の惡行を防止することにいたしました。その書付には

一、藩士の宿料は、お定めの木錢米代を拂ふものでありますから、土地の有合せの品で一汁一菜とし、酒肴その他馳走がましいことは一切してはなりませぬ。

一、召つれた家來共に非分のことを申すものあらば遠慮なくその旨を届け出で下さい。

一、大は工事の材料より小は草履草鞋にいたるまで、何品によらず買はねばならぬ品物はその時の相場にて代金を拂ひますから値引する必要はありませぬ。

一、旅宿はどんなに見苦しくとも、決して差支へありませぬ。修繕など絶對にお斷りをいたします。

一、村役人衆は役所へ詰めて居るには及びませぬ御用の節はその都度お出を願ひます。

一、凡て何ごとも極めて手輕にいたして村の冗な費えにならぬやうに心掛けて下さい。

大體かういふ意味のことが記るされてありました。これは川普請するのを恩にきせ、我がまゝの行ひなどあつては、これからさき〲お家の不名譽だと考へて、工事にとりかゝる前に斯やうな細い處にまで氣を付けた靱負は、花も實もある眞の武士と云はねばなりませぬ。薩藩士風は眞に、君のためには水火も厭はず、花も實もある武士の情を以て終始して居るのであります。

村人等の悦びはどんなであつたでせう、三百里（一千二百粁）も遠い國からはる〲と來て、自分達のために川普請をして下さるのみか、こんな優しい勿體ない制定までしてもらひましたので靱負をはじめ一同を、救ひの神樣や佛樣の再來とまで敬ひなつかしみました。

其の昔、朝鮮役の後、高野山に敵味方の供養碑を建立した薩摩魂は、形をかへていつもかうした現れがありました。

第八　工事の方針を定む

川普請は、實際は薩摩藩士によつて行はれたものでありますが、名目だけは幕府の工事といふことになつてゐましたので、幕府では、勘定奉行一色周防守正沆が、三川修築の總支配となりました。而も一度も工事に出ないくせに。その他美濃代官吉田久左衛門、御勘定組頭室田金左衛門、倉橋武右衛門等三十餘名の幕府の役人も出張して參りました。

齒を喰ひしばる思ひをしながら面に出さない靱負はこれ等の幕吏とも打合せした上、目論見書と實地とを能く對照して、次のやうに工事の段取を決めました。工事をする箇所は美濃國六郡、尾張、伊勢の兩國各一郡に亙つて、この延長は實に百十二粁（二十八里）に達します。これを一之手、二之手、三之手、四之手に區分して、その責任者を選定いたしました。

一之手

美濃桑原輪中より尾張神明津輪中に至る間

幕府側　石野三次郎、高木新兵衛

薩摩側　竹中傳六、八木七郎左衛門、茂木源助、下山牧右衛門、瀬戸石助、大山市兵衛

以下諸卒人夫三百五十名

二之手

尾張梶島村より伊勢田代輪中に至る間

幕府側　大久保荒之輔、青木次郎九郎

薩摩側　和田善助、上田金左衛門、永田嘉左衛門以下諸卒人夫三百有餘名

三之手

美濃墨俣輪中より同本阿彌輪中に至る間

幕府側　淺野左膳、高木內膳

薩摩側　永山市左衛門、濱島紋右衛門、籾木稲右衛門、江夏次左衛門以下諸卒人夫五百餘名

四之手

伊勢金廻輪中より同濱地藏附近に至る間

幕府側　新見又四郎、高木玄蕃

薩摩側　永吉惣兵衛、音方貞淵、濱島喜左衛門、藤崎伊左衛門以下諸卒人夫六百餘名

第九　辛い材料集め

なぜ川普請を、潤二月二十七日から始めることにいたしたか。これには大變理由があります。毎年夏の頃は雨天が多く從つて出水するのが例になつてをりますから、それまでに基本工事だけでもしてをく必要があつたから、薩摩藩士が美濃へ着いてから、僅か十數日まだ長い旅の疲れも休まらぬ中に、急いで普請にとりかゝつたのであります。

工事の仕様は、水行、定式、急破、圦樋伏替及修繕、田畑修土工等に大別され、材料としては木材、石材、粗朶、唐竹、葉付竹、砂利、藤、空俵、繩、槇皮、鐵類、松明、荷車

船、駄馬、駄牛などで、これを寄せ蒐めるだけでも非常な骨折でありました。殊に木材はその附近の材木商から買ひ上げた方が便利でありますが、意地の惡い幕府は、どこ迄も苦しめ踏みつけました。三十餘里も距つた木曾山林から切り出すように命じ、其の上、立木のまゝでこれを引渡しました。實ににくひ仕打ちです。只今のやうに汽車や汽船はないしその時代に澤山の材木を木曾の山奥から運んで來るといふことは實際難儀なことで筆や口にあらはせません。また石材は、その近邊には餘り多くなかつたものですから、多度山の奥や磐若谷川方面から曳々とはこんで來たのです。そのほか凡ての材料は皆相當の値段で買ひ集めたものですから、最初の見積りで借入れて來た三十萬兩のお金は、この材料を買つたり蒐めたりする内に、その大部分を使つて終ひましたのも實に無理のないことであります。お金を澤山費さして、島津家を亡ぼさうとする幕府の目的は、だん／＼達せられさうです。それで、どんなに多く要るとも、幕府からは殆ど補助もせず、只僅かに止を得ず壹萬兩足らずのお金と、木曾の木材數千本を提供したに止まり、薩摩藩が工事を終るまでに二百七十餘萬兩を支出したのに比較して、餘りに過少に、餘りに殘酷なやり方であつたと思はれます。全く血も涙も無いやり方なんです。

この豫算の超過といふことは、薩摩藩士にとつては最も苦痛を感せしむるものでありました。こんな調子では、この先きどれだけのお金が必要であるか殆ど見當が付かなくなりました。如何に大藩であらうともそんなに大きな負擔にはたへられませぬ。といふて工事を中途で廢止するといふことは、絶對に出來ない、主家を思へば百萬の生民を救ふことが出來ず、百萬の民を救はんとすれば主家をして或は沈めることになりはせないか。進退兩難に陷つた藩士の苦悶は思ひやるだに、同情の涙を禁じ能はぬのであります。原稿を手にして思はず悲憤の涙が流れてきます。

「死、あゝ覺悟の死はこゝである、豫算超過の罪は一死以て君家に謝し、天下のために倒れよう」

一同は愈々悲痛壯烈な決心を固めました。

凡そどんな仕事をするにも、それが出來上がれば相當の御禮があるとか或は恩典があるといふならば、その仕事をするのにも樂しみもありまた勵みも出ますけれど、その仕事を出來した曉は死んでお詫びをするあゝ何と悲しいことではありませんか。死ぬ爲めに仕事を進めるといふのは隨分哀れな話ではありませんか。薩摩藩士の仕事は丁度それであつて川普請が一箇所出來上がればそれだけ死ぬ時期が近付くわけなのです。一日經てばあと幾月間の壽命しかないといふことになるのです。こういふ悲しい事情の下に、而も前代未聞の工事を一年有餘の間、平然としてやり通した薩摩藩士の行爲は、まことに我が武士道大和魂の然らしむる處であります。世にいふ薩摩精神は正しくこれであります。古から慷慨死に赴くは易く從容義に就くは難しと云はれて居ります。この薩摩藩士は從容義に就て後死に赴きたるお手本を示したものであります。あゝ、今は亡き岩田德義翁の講演をこんなに聞いた當時が目の前に現はれて感慨更に切なる思ひがいたします。

第十　難工事重なる洗堰と油島の締切

材料が漸く整ひました。器具も機械もなく其の頃のことで身體一つで行らなければなりませぬ。工事の場所はいづれ劣らぬ難澁なものばかりでありましたが、その中でも三之手に屬する洗堰工事は實に容易ならぬそれは〳〵大變なものでありました。

大榑川と長良川の水が流れ合ふところが洗堰でありまして、岐阜縣大藪村の南方にあたります。昔から此の兩つの川床には大きな相違がありますので、平常何事もない時ですら大變な水勢となつてゐたのであります。それもその筈、長良川の川床は大榑川の川床より二米半も低かつたといはれて居ります。こうですから一度大洪水となれば四十粁四方に水音がゴーゴーと聞え身の毛の逆立つたものださうです。

見る〳〵中に人家は押し流れ家畜は流れ荒れまはつて海のやうになるのです。先年大隅地方を襲ふた大暴風雨の慘害を見聞した人は其の當時を思ひ浮べて身の毛の逆立つことでせうが、つまりそれが度々繰り返されるのであります。今から百九十一年前の第百十六代桃園天皇の寬延四年に、此の大藪村と向ふ岸の勝村が協力して、喰違堰をつくつて水の勢

を少くしやうといたしましたが、いくらか水勢は減つても、水害は免れることは出來ませんでした。そこで今度の薩摩工事は、その下流に長さ凡そ百三十米の洗堰を築いて、其の大榑川の水をごく靜かに長良川の方に落とす樣に工夫計劃した工事で、人間の力としては迚も驚きに堪へない大工事でありました。

ところが更に四之手に屬してゐる油島締切工事は、前代未聞の大難工事で、此の洗堰の難工より更に更に難工でしたから相像だにされぬ難難難工事でありました。油島は岐阜縣海津郡大江村字油島であります。

この締切工事は木曾川と揖斐川の流れ合ふところへ大きな堤防を築き上げて、此の堤防の力で兩川の水を完全に遮切ると云ふ夢想だに出來ぬ程の大工事であります。それではどうなることかと云ひますれば、平常は、堤防の、はづれにある喰違ひの水路から木曾川の水を揖斐川へ落して、船が自由自在に通るやうにするのでありますが、木曾川が三合目以上増水した時は、洗堰石堤の上から揖斐川へ、同五合目を越えると揖斐川はその東の福原川へ、若し八合目以上の大水となれば、締切堤の元口から南へ松ノ木村迄の堤防全體から流れ込ましめる仕組であります。反對に揖斐川か増水した時は、木曾川の方へ水を送るといふ設計でありまして、人間の仕業では到底出來さうにもない。何が何んでもやり貫くとは云へ、手の下し樣さへないのでありました。

弓矢とる武士、薩藩獨特の劒法示現流に、或は梅田流の槍術に、鐵砲の撃ち方に、黒田流の水泳に身を鍛へた藩士達も、此の一大土工に直面しては開くも涙語るも涙、武具を捨てゝ鍬、鋤、もつこを肩にして汗と涙と膏で働きとほした吾等祖先を偲べば、誰が泣かずに居れよう。技術も進歩してゐない當時、而も幕府の役人のいぢわるは言語に絶し、此の二大難工事が因となつて責任を強く感じ、切腹した藩士の悲壯なる姿が、如何にあはれであつたかを思ひます時に、思はず目かしらがあつくなつてきます。

私は此の難工の堤防に先人の遺蹟を前後五回にわたつて實地に視察しましたが其の中でも昭和十三年感激深い本市の青年代表の幹部達を引率して治水神社に平伏して泣いた青年

達のあの顔がまざ〳〵目の前に浮んできます。近くは昨年十二月大東亞戰爭のはじまる直前に此の地を重ねて訪ひ、恨は深し千本松の藏、胸をひし〳〵と打つたのであります。

第十一　斯の堤は君が肉　此の川は血

川床の基礎工事を立派にせなければ、堤防も洗堰も築くことは出來ない。元來此の川は深いので、どんな水枯れ時でも水の減つた樣に見えません。藩士達は、遂に考へたのです。殆ど使用の出來ない樣な、朽ち果てた古船を買つて來て、それに積めるだけ石を積み込み川の眞中迄乘り出して、船の底に穴をあけて、石も船も一緒に何艘でも沈めたのです。日露戰爭の時、廣瀨中佐は旅順口を塞ぐために旅順港外に福井丸と共に適れ武勇の華と散りましたが、薩摩の武士達は、戰ひこそしては居ないが、その樣な相似た働きをなしたのであります。然し此の功績を知る人は、あまりなかつたのであります。三月雪の深い頃、船が沈むと、直ぐ泳いで川岸に上る。思へばそれは〳〵ほんとに辛いことであつたでせう。義士の事蹟を調べますれば、泳ぐ時體が凍えて人事不省になつた人が、毎日毎日何十人もあつたであらうといはれて居ります。此の命がけの仕事を續けて、だん〳〵土臺を築き或は水中に浸りつゞけて石疊をなしたり、杭を打ち込んだりした吾等の祖先、思ふだにぞつとします。

又一方では蛇籠をつくつたり、馴れぬ手で籠を編む人の姿を考へてごらんなさい。それかと云へば石を運ぶ土を運ぶ、朝に霜を踏んで夕に星をいたゞいて、せつせと倦まず休まず働く藩士達、血の慘む勞苦は言語に絕して、村の人達も泣かぬ者はなかつたさうです。それを村人達が同情したりしますと、直ぐ幕府の役人が横から邪魔をなし、ひどい〳〵目を毎日體におぼへたのでありますが、それでも辛抱しました。

三重縣桑名郡多度村の西田喜兵衛氏の祖先にやはり喜兵衛翁といふ方があります。その當時薩摩藩士の御用方として勤務した人であります。朝夕義士が嘗めつくした、困苦欠乏あらゆる辛酸は遂に見るさへしのび切れなくなつて、次の樣に遺言されました。

「薩摩藩士の行爲は、涙涙涙、實に神々しいものであつた。神樣でなければ、あれだけ

の仕事の出來るものではない。子々孫々、ゆめ其の御恩を忘れてはならぬ云々」と

かうしたことからして此の子孫の方々から薩摩義士事蹟の顯彰が計畫せられる様になりましたが、其の後岐阜縣代議士金森吉次郎翁も西田翁と共に義士顯彰に努力した人であります。岩田德義翁も亦人の知るところであります。私は大垣城で金森翁と逢ひ、岩田翁とは、鹿兒島市で逢つて語るの機會をもち得ました。

金森氏一日木曾川を下り、油島千本松を過ぐるの時、詠まれた詩があります。

國士を經營して名節に殉ず
遺業千秋義烈を仰ぐ
志士當年死すとも猶生けるがごとし
斯の堤は君が肉、此の川は血

實に其の通り、全く其の通り、此の川普請は、義士の血と肉と涙のかたまりで出來上つた人間最高の尊い賜物であります。

第十二　恨は深し油島の割腹

恨は深し油島、されど〳〵人の魂がかたまつて、油島の締切も順調に進んで行く。然しやはり幕府の役人のいぢわるがつゞいた。こうした中にも藩士達は少しの築堤が成る度に今日とも知れず明日とも知れぬ命を捧げて、さびしい悦に入つた。

あゝ。此の誠忠の藩士達に、又何んと悲しいことであらう。限りない天の試錬にあはねばならなかつたのであります。三月の櫻花も過ぎて、ぽか〳〵と暖かくなつた卯月ともなれば、飛彈や信濃の山々の雪が解け出して、水源地から水が增えてきました。更に其の月の四日から降り出した雨は五日六日と車軸を流す大雨で、そのために思ひ掛けない大水となりました。かねてから萬一を慮つてこんな時の覺悟と用意はありましたが餘りの激しい天災に勝つことは出來ませんでした。苦心を重ねた基礎工事は勿論のこと、全く跡方もなく押し流され、その上今迄一方ならぬ努力で集めた木材や石材其の他一切の材料は何一つ殘らず流されてしまひました。あゝ何んと悲慘なる此の樣よ。吾等の祖先薩藩士達は天を

仰いで泣き地に伏して泣き、其の武運拙なきに男泣きに泣いたのであります。而も幕府の役人は例によつてこの悲惨のどん底にある人達を一言の慰めもなく、口を極めて侮り馬鹿士の腰ぬけのと悪口雑言の限りを浴びせました。

本場所擔當の主任永吉惣兵衛と音方貞淵の兩士は歯を喰ひしばつて、じつと涙をこらへてゐました。平常平田總奉行にならぬ堪忍するが堪忍と諭されたが斷腸の思ひに遂に決するところがありました。「音方氏、かうなつたことは天災とは云へ、皆自分達の責任であります。不行届のためと申さねばならぬでせう。お互に平常の覺悟の通りに殿様に對して又總奉行へのお詫びに割腹しようではありませんか」と惣兵衛覺悟を申せば、音方は、「まあそれは、あなたのお言葉を聞く迄もない。國許を出立する時、死をもつて母上からお諭しがあつたが、永吉氏さうだ、こゝだ／＼」と、貞淵は賛成しました。

遙々一千二百粁も離れた西の方なる寸時も忘れ得ない懐しの薩摩に向つて合掌し、お家の安泰と殿様の健康を祈り、互に刺し交はして物の見事に薩摩武士はかくの如しと還らぬ手本を示して相果てました。鳴いて血を吐くほとゝぎすの聲と共に、空しく消ゐた薩摩武士最初の割腹者であります。此の日は寶暦四年四月十四日のことであります。ところがかうしたことで自害した人の家は斷絶されるきまりでしたので、遺骸は次の様な葬證文を差出して海藏寺に葬られたのであります。私は親しく海藏寺を訪問して、其の葬證文を拜見し涙ぐみました。總てゞ十一通あります。今同寺に保存されてあります。

私も其の寺から其の石版刷を一枚頂戴して軸物として居ります。

一札の事

松平薩摩守家來永吉惣兵衛腰の物にて怪我いたし相果候に付貴寺に於て葬り申度段、御頼み申入候所相違御座なく候。右惣兵衛宗旨の儀は、代々禪宗國元にて笑岳寺旦那に紛れ御座なく候。尤も今後右惣兵衛儀に付、何様の儀出來致し候共、御寺に御世話掛け申間敷候、後日の爲證仍て如件

寶暦四年四月十六日

松平薩摩守內
二宮　四郎右衛門　印

勢州桑名
海藏寺

こんな悲壯な死に方が、又葬方がありませうか。武士の最高手本を示して自刄した人も腰のものにて怪我をして死んだと云はねばならぬ情なさ。思ふだに悲しい限りではありませんか。文中に宗旨のことがありますのは、其の頃大變やかましかつた切支丹禁令の折でありましたから永吉惣兵衛の家は禪宗であることをはつきりしてあるのであります。

第十三　恨重なる洗堰の悲壯

大搏川の洗堰も、擔當者永山市左衛門や鄕田喜八等はじめ、みんなが命を的に精出したので、さすがの難工事も調子よく進捗して四月の末には大方の骨組も出來上つて、幕府の內檢分も何事もなく濟んだのでありました。ところが、こゝでも油島と同じ様に五月初旬

の大出水で見るかげもなく、みんな押し流されて、薩藩士達を悲境のどん底につき落したのであります。永山、鄕田兩氏はもとより、力を落し切つた面々は、そのために三日三晩食事もろくにとらず、さすがの薩藩士も茫然自失しました。命がけの努力も、莫大な經費もたつた一夜の大洪水で何物もなくなつてしまひましたので、若し工事をするならば全然最初からやり直さねばならぬ破目に陷りました。

これでは力もなくなり自失するのは、人間である以上、迚も免れ得ないことであらうと思ひます。

永山は云ひました

「鄕田殿、永吉氏等は油島で割腹せられた。我々も此の儘では濟むまい。もとより生別又兼死別で出立したが、其の日が來たと思ひます」と悲痛に沈んでゐました。

鄕田も又云ひました。

「其の通りですよ。今の場合執る道は只死の外にありますまい」と暗然たるものであり

ました。

かくして兩人は用意の短刀で刺違へる寸前、濱島紋右衛門と永田杢右衛門が驚いてその場に走り込み、兩人の手を押さへて、「待つた、待つた。早まつてはなりませんぞ御兩士」と言葉をかけて、短刀をもぎとつたのであります。

「割腹の責任は我々も同じである。みんながさうして死んだら今後はどうなりませう。我々が生きて歸らうと云ふのではありませんが、今命を亡くしたと云ふ覺悟で一層努力し何度やり直さうとも、工事を完成してから死んでも遲くはあるまいと思ひますが」と友情濃かに話し合ひましたので、二人も「いや全く早まつて面目もない次第であります。それでは死んだことにして、もう一ぺんやり直しを致さう」と決然立ち上つたのであります。かうして再び工事に着手、遂に奮闘はつゞけられて五月廿二日の第一期工事の終るまでには再造されるに至つたのでありますが、あゝ何んたる無情が重なることでせう。その年の夏の大水で、又もや、すつかり押し流されて終ひました。

人間としてのあらゆる努力も水泡となり、頑張りで知られて居た永山市左衛門も力つき果てゝ、郷田喜八と共に此の二人が割腹したのであります。これが九月九日のことです。それから初めの七日を濟ませてから永田杢左衛門が追腹し、それから又初めの七日が過ぎて濱島紋右衛門が切腹してみんな其の自分の責任を明白にいたしました。此に私は思ひます。それは自分の業務の終へないのに割腹したことはどんなものかと思はれますが、これは實に當時の實情が、全く止むを得ないものであつたのであります。實に萬感無量何とも申されません。翻つてこの人達の死が、かへつて生きて働いて居る人達に非常に強い強い心を起させましたので、前よりも、もつと／＼發奮する動機となつたことゝ思ひます。

第十四　悲憤におのゝく一之手の逆川堤

流域沿岸の住民達は、薩藩士の勞苦に同情して親しみ深い間柄でありましたが、前にもお話いたしました樣に、幕府の役人の横着なことは筆にも口にもつくされません。只々薩摩人を苦しめ拔いて島津家を亡きものにとのそれだけの樣に思はれます。あまりに見兼ね

て、住民達は幕府の役人を毛蟲の樣に嫌がりましたが、「泣く子と地頭にはかなはぬ」そのやうに、どうにも仕樣がありませんでした。今私は最も幕府の役人達が無暴の限りを盡した實例を當時の記錄からお話いたします。

難工の一つに一之手の逆川締切堤があります。これは特に幕府が薩藩士を苦むる爲に築かせたところといはれて居ります。寧ろ土地の村人を救ふよりも、島津征伐藩士攻めの爲めに。ところが此を受持つた平山牧右衞門等は夜を日についで働きました。人間のすべての希望も忘れて、お家大事にとのたて前から働き拔いたのであります。其の爲めに此の難工の新堤が豫定よりもずつと早く終へて第一期工事中に竣成したのであります。かねて腹黑い幕府側では、かう早く出來上つては大變だと考へて、ひそかに土地の無賴漢を集めて「金銀は望みにまかせるから、此の逆川の新堤を一時でも早く破壞せよ。」と命じたのであります。

さあ大變、「この堤は君が肉、この川は血」と云はれる新堤を、無賴漢共は一緒になつて、たたつこわしはじめました。

もとより無賴漢のことで、家はなし土地はなし、只金銀を望みにまかせて貰へるとの事で勿論水害などはどうなつてもよいのですから、盛んにこわしはじめましたが、恰も八月九日の眞夜中のことでありました。ザア／＼降る雨の中に二十幾人の惡漢は夫々手に鋤や鍬をもつてこわして居ります。

此の雨に何んの障りもなからうかと、薩藩士達は工事小屋で語つてゐましたが、遂に見廻してはと話合ひして、平山牧右衞門、瀨戶石助、大山市兵衞の三名は、神ならぬ身のこんなたくらみがあらうとは、夢にも知らずして見廻つたのであります。

ところが大變、新堤にはたくさんの怪しい人が集つて血と肉と淚で出來上つたこの堤をこわして居ります。藩士達は

「無禮者」と三人共大聲揚げてどなりつけました。あゝ其の心の中はどうでせう、泣いても淚しても人間としてこらへられぬことであります。

無頼漢は
「愚圖愚圖云ふな。頼みもせぬ新堤などつくるから、今破壞してくれるところだ。不都合な奴者だ」
と云つて、如何に止めても一向きゝいれませぬ。大山市兵衞、遂に刀の柄に手をかけ乍ら
「何を無禮な」と詰めかけました。
「何を青侍ども」とわめきつゝ命知らずの惡漢共は三人に向つて、鍬鋤で手向ひました。平常「どんなことがあつても堪忍せよ。ならぬ堪忍するが堪忍だ。自重せよ。」と總奉行からは敎へられて居りましたが、今は我が身に降りかゝる火の粉を拂はねばなりませぬ。三人と廿幾人が入り亂れて、大雨の中に渡合ひ、大亂闘をはじめました。あゝ無念。あゝ無念。ならずものは大部分斬り殺されましたが殘るものは今はかなはぬと眞夜中の暗がりに逃げ去つたのであります。

いつの間にやら雨は止んで、九日の月は新堤に無頼漢の斬殺された死骸を照らして居ります。これを眺めた三人は血刀を仕末して、たとへ、どういふ理由があつても、こんなにたくさんの人を殺した其の罪はゆるされない。生きて總奉行様に御迷惑になつては申譯がない。一そのこと、死して萬罪を申し開かう」と覺悟をいたしました。あゝ何んと悲壯なことではありませんか。
しかし乍ら天の助けか、早く氣がついて、さう破壞されずに濟んだことは、有難いことでありました。

瀬戸石助其の場を去らず全責任を負ふて物の見事に割腹しました。同じく十五日に平山牧右衞門、同じく廿一日に、大山市兵衞が割腹して罪を謝して居ります。此の寳暦の治水工事はまことにこんな悲壯な裏面がありますが、若し、今後一層探究いたしましたならばまだ／＼こんな悲劇がいくらもありませう。

大正六年四月三日鹿兒島に於てはじめて薩摩義士の祭典と講演會が開かれました。もうそれから廿六年になります。その時、薩摩義士の顯彰に全力を捧げた岩田德義翁が、この

三人の事蹟について次のやうに話されました。此の三人の事蹟も實は美濃羽島郡江吉良村曹洞宗清江寺住職武田信保氏の話をもとにして、岩田翁が調査發表されて、油島千本松原の記念碑にも、其の後附け加へられたのであります。

「……然るに此に不思議に思はれますことは、是等義士の人々が切腹された日が、ちやんと七日七日と間を置いて居ることであります。是れは何故かと申しますと、定めてかういふ譯であらうと思ひます。即ち此の三人の間には、もう吾々の成すべき仕事は完成して此の上は世に思ひ殘すことはないから、お前が先きに切腹したらよからう。さうしたら七日の間は、お前の爲めに私が追善供養を營んで進ぜようと、かう云ふ話が三人の間に成立つたことゝ思はれます。それで彼此後先になつて與に追善供養し、其の冥福を祈つたうへにて、切腹したものと思はれます。即ち追腹を切つたものであります。是に依つて考へて見ましても、義士の人々が銘々に受持つた仕事が出來上ると同時に、自刄したことが益々明白になつて來るのであります。されば義士の命は、工事の成就するとともに、一歩一歩死に近づくのであります。其の時に於ける義士の心情を酌み取ればいたはしなんどと云ふばかりではありません。これを以て、彼の赤穗義士の死に比べたならば、赤穗義士の死は寧ろ易くして、薩摩義士の死は難しかつたものでありませう。彼の赤穗義士の如きは平常恨み重なる敵の首を打取つた上に、一同切腹したのでありますから、何人も愉快に死んだに相違ありませんが、薩摩義士の如きは、さうではありません。地味なる仕事を爲しつゝありまして、しかも、其の成功の日を待つて自害するといふが如きは、人生の悲慘此の上もありますまい。これを赤穗義士の如き慷慨義に赴くことの易くして、薩摩義士の如きは從容死に就くことの難きを踏んだものであります。されば薩摩義士の境遇ほど世に氣の毒な事實は恐らくありますまい。」云々と

第十五　繰り返す涙の生活

海山遠く幾百里、故郷を離れて慣れぬ仕事にいそしむ藩士達は、此の沿岸の民家に分宿しましたが、積年の水害になやんだ人々のことで、痛く貧乏であります。從ひまして滿足

な家とてはありません。荒むしろを敷いてある家は、まあ、ちつとはよい方で、薄いせんべいふとんに土間に寢る藩士達の辛勞を思つて下さい。御馳走とては一汁一菜。全く美味しい物を食べたことはありません。夜を日についで働いて歸つても、風呂桶一つあるではなし、時たまに、行水に疲れを休めるぐらゐが關の山でありました。垢じみた衣服をつけて、朝早くから晩おそく迄働く。おそくなつてから洗濯もせねばなりませぬ。木枯の寒風が戸の隙間から洩れて來ます。あゝこうして結ぶ夜な夜なの夢は如何でしたでせう。故郷に在らせられる父母は如何に。妻や子は定めて淋しがつて居るであらう。生きては歸らぬと別離したものゝ、或は工事完成の上は歸られるであらうと果かない望みをもつて、毎日をわびしく、くらすであらう。薄い行燈のゆらぐ燈火に、思ひは千々に亂れて泣いた夜も幾夜も續いたことでせう。

しかしながら工事は何時出來るか、見當はつかぬ。二年かゝるか。三年か。五年か十年か。何十年か。あゝ世にも憐れな話しではありませんか。義士達の眼にもそゞろに涙せきあへない時もあつたでせう。

これだけならまだしもよい。何某殿は幕府の役人と、意見の衝突で無念の詰腹を切らせられたとか。何某殿は工事完成して、責任を全うして自殺せられたとか。聞かぬ日とてはなし。それも他人のことならまだしも、廻り廻りて今日とも知らず、明日とも知らず我が身にふりかゝつて來ます。あゝ何んといふ氣の毒なことでありませう。世の中に、こんなあはれなことがありませうか。

大君の爲めに、皇土を守り皇民を救ふ一念に、所謂犧牲獻身の其のまゝとなつて、此の艱苦を敢へて忍び耐へ切つた薩藩士は正に此の世ながらの神樣でなくてどういたしませう。

江戸表へ參覲の藩主重年公は、其の年の五月十一日鹿兒島城を發足されまして、七月五日に大牧村の本舘にお着きになりました。殿樣は親しく工事の樣を御視察になり、其の難工事の並大抵でないことを目の前にして、藩士の勞苦に涙して感謝せられました。わけて平田總奉行も殿樣のお顏を拜し、泣いてお勵

ましになつた御禮を申し上げたと、傳へられて居ります。

第十六　さすがに大願成就

月日の流れは早いもので、義士達の勞苦を每日送迎して、早や秋風のそよ〳〵と吹く九月になりました。それからは、天高く馬いななく美しい日和が續きましたので、遂に此の月の二十二日から第二期工事に着手いたしました。しかしながら悲しいことには、此の時既に三十八名の割腹者を出して居ります。工事が原因となつて、病の爲めに死んだ人が十八名もありました。このやうにたくさんの忠義な藩士を失ふことは、總奉行は身を切らるゝよりも辛いことでありました。さうして益々責任の重きを加へました。そして生き殘つた藩士達は、愈々決心して一層奮勵努力致したのであります。前にお話いたしました樣に第一期工事は、夏の雨期に見る影もなく荒されましたが、それでも、決して力を落さずに必死の努力は、やはり相當つゞいて居ります。今度といふ今度は來年の雨期前に完成するのだと意氣込んで、多度山おろしの寒風の何のそのと齒を喰ひしばり身を切る樣な寒い霜

の朝、雪の夕も、汗にからだを汚して働きつゞけたのであります。

あゝ、何んと有難いことでせう。人間の力では迚も出來ないと決つた難工事が、其の全地區に渉つて出來上るではありませんか。たとへ、死力をつくしても成功は覺束ないと云はれた此の川普請が。人間の力も實に偉大なものであります。然し、殘念なことには更に十幾名の割腹者と、二十何人の病死者が出ました。又これに費した工費は莫大なもので豫算の超過に至つては大した巨額となりました。

然し、十二月二十三日に先づ二之手の工事が出來上りました。これを手初めとして、翌くる寶暦五年三月二十八日最後の工事四之手が全部出來上りました。此の完成迄に僅かに一年有餘でありますが、此の間に受けた義士の忍苦は例ふるにものなく、或は天災に苦しめられ、其の困苦欠乏は今日の大東亞戰爭で、銃後の國民が未だ嘗つて經驗されない悲慘を繰り返し、あまつさへ割腹、病死前後に續出し、「斯の堤は君が肉、斯の川は血」の詩の通りであります。人間の力ではなしに、全く神業としか思はれません。

あゝ遂に完成しました。壯烈鬼神を泣かしめた大事業が遂に完遂されたのであります。

江戸表からは早速檢分役として、目付牧野織部成賢、勘定吟味役細井九助政昌等の一行が四月なかばに大牧村に着きましたが、十四日から薩藩側の係の人達と、一緒に立會の上これを一之手、二之手、三之手、四之手の順に檢分したのであります。そして五月二十二日にそれが終りました。ところが其の出來榮の立派なことに舌を卷き、感嘆久うして「まことに見事な出來上り、たつた一つの申分もなく、ほんとに結構で何んとお褒めしてよいやらわかりません。御心勞の程如何にもお察し申します」と稱讃いたしました。幕府の方では、かほど迄に立派に出來あがるとは、思つて居なかつたのであります。かくして總奉行はじめ薩藩士達の勞をねぎらひました。

それから後のことであります。大榑川の洗堰や他の新堤には次のやうな立札が建てられまして、村人達がこの制札の前に、ひざまづいて合掌涙ぐみ、深く深く謝したといはれて居ります。

札には覺と見出しをしてありますが、わかりやすく書きますと

覺

御用の外は一切此の洗堰（堤）の上を通つてはなりません。勿論この堤の上に上ることも、してはなりません。そして又、船などつないでもなりません。

寶暦五年亥五月

高木新兵衛
高木内膳
高木玄蕃
青木次郎九郎

殿様から戴いた豫算の三十萬兩は、それこそ全くゆめでありまして、實に二百七十餘萬兩を費しました。總奉行はじめ、薩藩士の面々が決心して豫算超過の責を負ふ所以も、よくわかります。

直接恩惠を受ける村が、三ヶ國で百七十餘ヶ村、間接の惠みに浴するもの百ヶ村を越えて居ります。

此の命の恩人、薩摩樣達の恩を、永久に子々孫々忘れぬ樣にと村々の有志者が一本づゝ松苗を植ゑたのでありますが、これが油島締切堤の千本松であります。今は緑したゝる大きな樹となつて、繁り合ひ永久に輝く偉績と共に悲しき松風の音が身にしみます。ゆるやかに流れる川水に其の姿をうつしてゐますが、義士の魂だと傳へられる不思議な形をした笄松と名づけられた松が一本あります。石碑も治水神社も、今は涙の種子であります。大きい松は私共が二人で抱く程でありまして、神社の附近にあります。寶暦五年に植ゑたのですから今年から丁度百九十一年前に當ります。

第十七　藩士達國に歸る

寶暦五年五月二十三日から翌くる二十四日には藩士達が愈々歸る日であります。村人達は、神樣と崇め佛樣とおがんだ義士達の歸りとのことで、「みんな出揃ふて御見送りするのぢや」と云つて、後光を拜する氣持ちで、みんな涙にむせんでゐました。慈父の親しみを持つ村の子供達は、村界まで見送つたのでありますが、青壯年の人達は四十粁（十里）の遠く迄見送つて後姿をおがみながら泣いて別れました。

大藪村の、庄屋八左衛門の宅に居つた永田體左衛門は、八左衛門から請はるゝまゝに

枝も葉もなほ〳〵ふやせ今年竹

の一句を物して手渡した風雅なお話さへありますが、それは今尙ほ大藪町の山崎家に大切に保存されてあるさうです。此の外に當時の藩士達の刀や矢立や杓子などが殘されて居るとのことであります。

一行は夫々の途によつて、或は江戸へ或は郷里へ旅立ちましたので總奉行も安心したのであります。考へて見ますと、此の川普請の終ると共に、重なる人達は工事に對する豫算超過の責を負ひ、或は種々の手違ひや、幕府との對立などのことからして、割腹した人は既に五十餘名となり、病死した人は三十餘名もあるし、總奉行としては洵に筆や口につく

されぬ自責の念に堪へないところであります。然るに今尙ほ此の上に多數の犧牲者が出る樣では更に殿樣に申譯ないと思ひ詰めたのも無理はありません。

靱負は考へました。今はお家浮沈の一大事の秋であります。どうか皆さん、死んだものと心得て、此の二百七十餘萬兩の大金返濟につとめて下さい。且つは今は亡き人達の菩提を弔つて下さい。お家を思はぬ方は、よもや一人もない筈、死する命を永らへて、お家の復興を賴みます。これ此の通りと、情理をつくして諭しましたので、藩士達は、それでは總奉行樣のお諭しに從ひますと云つて、此の地を後に旅立つたのであります。

第十八　總奉行平田靱負正輔の最後

申すまでもなく、此の平田靱負正輔といふ方は、實に立派な大人格者であります。此の人のみは最後迄生き殘つて、寶曆五年五月二十五日を以て切腹して居ります。五月二十二日工事の檢分が立派に濟んだので、それから靱負は獨り大牧村の役館にあつて深い思ひに決意の程、あらはれて居ります。二十四日の夜はしん／＼と更けて行きます。行燈の側に居る靱負は、萬感胸に充ちて犧牲となつた藩士達の妻子の身の上を思はずには居れません遺族のことも又苦痛の種子でありました。多くの藩士を失ひ、莫大な負債を殘した主家が案ぜられます。思ひは千々に碎け乍ら細々と書し殘しました。

眞珠灣頭黑暗々の海底を從容として、玉碎突入した九軍神の一人、吾が橫山正治少佐が謙讓の中にも烈々たる赤誠を示した遺書があります。

「皇國非常の秋に際し死所を得たる小官の榮譽これに過ぎたるはなし。謹みて　天皇陛下の萬歲を奉唱し奉る。

二十有三年の間、亡き父上、母上樣はじめ家族御一同樣の御恩、小學校、中學校諸先生ならびに海軍において、御指導を賜はりたる教官、上官、先輩の御高恩に對し、衷心より御禮申上候。同乘の上田兵曹の遺族に對しては氣の毒に不堪、最後に皇恩の萬分の一にも報ゆることなく死する身を深く恥づるものに有之候

海軍中尉　橫山正治

とありますが、古今忠臣は、胸中君國のみにして、而も情こまやかなるものあるを切々に感ずる次第であります。

平田總奉行は、その夜まんじりともせず、翌廿五日の朝まだき、身を清め日の出を拜み西方に向つてお家の御安泰と隆盛を心からお祈りして、自己の不明を詫び、出發に際して殿樣からおし戴いた短刀を脇腹に突き刺して、潔ぎよく薩摩魂の華と散つたのであります時に年五十二歳であります。五十歳で思ひます。島津齊彬公五十歳にして薨去、南洲翁五十一歳にして忠魂再び還ることなく城山に散り、五十二歳にして平田總奉行散る。五十なる歳には、不思議なつながりがあります。遺骸は伏見の大黒寺に葬り、遺髮は、鹿兒島の妙谷寺に納めたのであります。

この朝、村々の重だつた人々は御禮言上の爲めに參りましたが、早や息は絕へて冷たい亡骸でありましたので、村人達は、地にひれ伏して泣き悲しみました。

そこを寶暦治水誌に

「幕府工事を點檢す。寶暦五年四月十四日より五月二十二日に至る。時に平田正輔去歳病に在て癒へず、今亦病褥にあつて事を視る。二十四日嘔血屢々、二十五日遂に死す。卽夜遺骸を擁して伏見大黒寺に至つて葬る云々」と

ありますが、病の床にありながら切腹したと云ふが如き、實に悲慘極まることではありませんか。是ぞ忠義天日を貫き至誠鬼神を泣かしむと云ふべきものでありまして、此の樣な忠誠無二の臣がありましたから、皇土を守り、皇民を救ひ、主家を全うしたもので、靱負以下の薩藩士亦齊しく忠誠の士と申さねばなりません。

この偉勳はながい間、世間に知られませんでしたが、水害地方に薩摩義士顯彰會が設定され又鹿兒島側でも相共に力を效して漸く知られる樣になりました。

畏くも大正五年十二月二十八日靱負に對し從五位を贈らせ給ひ、君恩枯骨に及びました定めて薩摩義士達地下にあつて聖恩の有難さに感泣せらるゝことでありませう。

第十九　伊集院十藏久東の工事報告

五月二十二日に檢分が終へましたので、副奉行伊集院十藏久東は、其の翌くる二十三日大牧村を出發して、江戸表へ向ひましたが、其の月の三十日芝の薩藩邸に着きました。丁度其の折藩主重年公は、江戸に滯在中でありましたので、事大小となく工事の模樣を申し上げました。中にも多數の藩士の割腹や病死の樣を聞いて、やるせない思ひに沈まれましたが、殊に、平田總奉行の自刄をお聽きになつた時、哀悼の涙にくれさせられたのであります。重年公は、去年木曾川治水工事を受けられましてから、心配の餘り病床に在りましたが、この報告を聽いてだん／＼病は重くなつてしまひました。

先きには夫人村子の方が、心配の餘り其の前年の二月三日亡くなられました。重年公も愈々苦惱を重ねて、遂に靱負の自刄後、廿二日目の六月十六日、二十七歳のうら若い青春の身を以て逝去されたのであります。思へば治水工事が重年公御夫妻の苦惱となり心配の餘りこの役に殉ぜられたものであります。洵にいたはしい限りではありませんか。

重年公は報告を聽いて、六月一日附を以て工事成就の旨を幕府に屆出でられましたところ、將軍家重は、公に時服五十を贈つて、其の功績を賞しました。又九月五日には伊集院十藏久東等十三名の薩摩藩士を登營せしめて、金子時服を與へて其の勞をねぎらつたのであります。

第二十　負債にからむ秩父崩

重年公が逝去されましたので、公の掌中の玉と育まれました唯一人の又三郎殿は十一歳にして、島津家第二十五代の藩主として封をつがれました。幸にして、祖父大隅守繼豐公が其の頃隱居の身分ではありましたが、御存命中なので後見となつてこの幼主を輔けられました。

寶暦八年四月、將軍家重に初めて謁し、六月從四位下少將に任ぜられ、例の通り將軍の名を一字を許されまして、薩摩守重豪と改められました。此の幼い殿樣にして治水工事後其の當時大阪等の新舊負債は途法も無い多額に上り、財政上の一大難局に立たれたことは實に痛々しいことでありました。

しかし重豪公は人となり、心の大きい進歩的な方でありましたので、産業を起し、國産を増して方法を立てられましたが、公の大事業計畫で益々財政難となりました。

木曾川治水工事は、それこそ前代未聞の大工事で、村々の住民は生れ代つた様に喜びました。これを國家の上から見てもどれだけの大功であつたかも知れません。

しかしその大きな負債のために、これが利子だけでも大したもので、うか／＼して居たら自滅するより、他に途はないやうになりました。かうしたことからして、重豪公は四十三歳で隱居せられまして、十五歳の齊宣公が家督を相續せられました。此の時代は、もう重豪公のいろ／＼な新しい御計畫のための費用迄重りましたので、七十七萬八百石の大藩も殆どこれを支持することが出來兼ねて、上下共に藩債に苦しんだのでありました。

そこで齊宣公は財政改革を計畫せられましたが、遂に世に云ふ薩摩の秩父崩となりました。これは齊宣公が極端な財政整理の爲め、勤儉尙武の主義を以て、費用を節せられて起つた大悲劇であります。或は幕府に請ふて參覲を十一年猶豫を相談されたり、重豪公の御鳥見、御鷹場の樣な不急のものは止めとなつたりしました。殊に公は秩父太郎伊賀を重用して、只管財政を整理するに急激でありました。更に幕府に相談して長崎貿易さへ願出られまして、此の間に秩父太郎伊賀など非難の的となり、重豪公の意見や重だつた家臣の間にも相當劇論するところとなり、秩父はじめ關係者の切腹や遠島となり、齊宣公も責任上封を齊興公に讓られましたが、公は第二十七代に當ります。これが、秩父崩でありまして重なる立派な家臣を多數失つたのでありました。

第二十一　齊興公調所笑左衞門廣鄕を登用せらる

齊興公は封を繼がれたのは文化六年六月でありますが、英名は天下に知れわたつて、參議宰相公と云へば、文化、文政から天保、弘化にかけて誰知らぬものもないと云はれて居ります。

公の時代は前代からの藩債は積り積つて、五百萬兩に達してゐますのでこの大負債に重きを置きながら外交に意を用ひ朝廷の御信任厚く、幕府との交渉も順調に行はれたのであ

ります。先づ財政の基礎調査として、今年から百二十八年前の文化十年に、石高と人口の調査がありました。即ち、

高、六十四萬七千百石――大隅、薩摩一圓と日向諸縣郡
十二萬三千七百石――琉球
合計七十七萬八百石

薩摩七十七萬石の稱はこの時から起つたとのことであります。

其の後文政九年「私はキリシタン宗ではありません」といふ宗門改の時の人數を見ますと、男女合せて八十六万五千百四十一人となつて居ります。

文政八年八月、齊興公は愈々決するところがありました。調所笑左衞門廣郷の偉材なるを知つて、笑左衞門が、お茶道役であつたのを、拔擢して御側用人として財政改革の任に當らしめ、そして政務を一任せられましたので、笑左衞門は深く公の知遇に感激して、一生懸命財政の恢復をはかり、さしもの五百万兩の藩債をも、物の見事に整理し了り、又力を殖産興業に盡し、或は幕府の目を掠て支那貿易を營むなど大いに藩の財力を富裕にならしめました。たゞ殘念なことには、財政上のことも關係して、赤山崩（近藤崩、高崎崩）が起つて、嘉永殉難の志士を多數出したことであります。

此の間の有樣を極く簡篁に話しますと、笑左衞門ははじめ御辭退致しましたが、齊興公の決意を知り、命を奉じて一途に財政を整理し產業を興し、貿易に當りました。其の手足となつて働いたのが小納戸奉行の海老原宗之亟であります。はじめ家祿平均論も出ましたが、これは全然行はれずに終りました。而して調所は大阪の濱村孫兵衞を賴つて、薩摩の國產品賣捌きを賴み込み、大島や琉球の砂糖の專賣をはじめ、其の他藩内の一切の產物の販賣法を改め、豫算に於ては新規事業は一切これを認めない方針をとり稅率を增したのであります。稅について見ますと米一石につき本稅八升一合附加稅一升一合合計九升二合でありしたものを、後には百石頂戴する武士階級から、七十四石四斗納める法を立てましたので、僅かに其の所得二十五石六斗を實收しました。此のために一般に藩士は貧乏となり給地を賣り拂つて無祿となるものも少くありませんでした。

此の間に於きまして調所笑左衛門廣郷の功績は實に偉大なものがあります。彼れは只一死奉公、常に死を以て努めて居ります。しかし笑左衛門も後には心身共に疲れ果てゝしまひました。彼れは自己の責任を果し、薩藩財政を救ひ出し五百萬兩の負債を全部返濟して尚ほ五十萬兩を貯蓄したばかりでなく、薩摩藩をして工事以前よりも、幾倍も裕にいたしました。幕府が財政上、永久に痛手を與へようとした思惑は、からりと外れましたのは眞に皮肉なことであります。嘉永元年十二月十八日血を吐いて死にましたが、或は毒殺と云はれ、或は自殺といはれて居ります。彼れを最も惡く云ふ人もありますが、それは齊彬公に反對したからであります。齊彬公が海外文物をとりいれられて財を費されるを惜んだからであります。然しながら、明治維新の大業に心配なく流用された巨費は、笑左衛門の功績に負ふところ極めて大であります。贈位の申請についても、談合ひがあつたさうですがいろ／＼な事情で未だその恩典に浴して居りません。

第二十二　明治維新

時代は推移しました。嘉永、安政となり、島津齊彬公は大いに尊王開國を唱へ、藩士を教育なされました。此の幕末から明治の大御代にかけての轉變期に、我が薩摩藩が勤王軍の急先鋒となつて、明治維新の大業を翼賛し奉りましたことは、明治天皇の御稜威でありますことは申すも畏いことであります。これを薩藩から見ますと、神武天皇御東征に從軍して、大和朝廷の建設に翼賛し奉りました傳統の勤王精神の發揮せられたこと勿論であります。或は又、寳暦治水當時の幕府の無暴なやり方に憤激した精神も、知らず知らずの間に、加味されて居るところもあるのではないかとも思つて居ります。

而もそれは、其の根本に於きまして、皇土を守り、皇民を救ふことに一念貫きとほした薩摩義士の精神に則り、至誠天恩に報せんとの盡忠報國の實踐をなしたものであります。

第二十三　義士の墓

伊勢國桑名町海藏寺

一　平田靭負（割腹）　　永吉惣兵衛（割腹）

音方貞淵（同）
藤崎伊左衛門（同）
濱田喜右衛門（同）
崎本才右衛門（同）
川上島右衛門（同）
中間良助（同）
鬼塚喜兵衛（同）
江夏次左衛門（同）
野村八郎右衛門（同）
本田甚兵衛（同）
四本平兵衛（同）
家村源左衛門（同）
山本八兵衛（同）

同國同郡同町安龍院

茂木源助（割腹）
永田伴右衛門（同）
前田兵右衛門（同）
永山孫市（同）
井出渡左衛門（割腹）
恒吉軍太郎（同）
藺田新兵衛（同）
瀧間平八（同）

姓不詳（同）

同國同郡同町長壽院

上田金左衛門（割腹）
永田嘉右衛門（割腹）
徳田助右衛門（同）

以上三寺の墳墓は、現今では海藏寺の境内に地を相し、其處にその全部を纒めて合祀してあります。

同國桑名郡七取村常音寺

松崎仲右衛門（割腹）
森權四郎（病死）
尾上與兵衛（同）
田中善兵衛（同）
川邊家來六左衛門（同）

同國同郡楠村長禪寺

和田善助（病死）

美濃國海津郡石津村圓城寺

稲富　市兵衛　（割腹）
貴島　助左衛門　（同）
藤井　彦八　（同）
鮫島　甚左衛門　（同）
中間　八内　（同）
永田家來關右衛門　（同）
姓不詳　八郎兵衛　（同）

美濃國養老郡池邊村天照寺

仲間　新左衛門　（病死）
伊地知下人助次郎　（同）
山口下人利右衛門　（同）

吐田　軍七　（割腹）
萩原　勘助　（同）
石塚　仁助　（同）
横止　治左衛門　（同）
野村藤藏　家來　（同）
弟子丸　家來角助　（同）
薗田下人　六平　（同）
川上下人新左衛門　（同）
八木　七郎左衛門　（同）

川合　瀬兵衛　（同）
今村下人善左衛門　（同）
田中下人惣右衛門　（同）
伊集院足輕　勘助　（同）
田中下人　長八　（同）
太田　喜右衛門　（同）
大窪　十右衛門　（同）
大橋　七郎左衛門　（同）
貴島下人覺右衛門　（同）
松下　新七　（同）
木藤下人　仁助　（同）

同國安八郡仁木村心岩院

坂本下人權右衛門　（同）
平田下人良左衛門　（同）
平田下人　岩七　（同）
堀下人　六左衛門　（同）
伊集院下人三四郎　（同）
種子田下人　仁八　（同）
河野下人　助四郎　（同）
寺師下人　與八　（同）
山口　清作　（同）
伊集院下人市右衛門　（同）

小山田八郎右衞門　（割腹）

同國同郡御壽村江翁寺

永山　市左衞門　（割腹）

永田　李左衞門　（同　）

濱島　紋右衞門　（同　）

同國羽島郡江吉良村清江寺

瀬戸　石　助　（割腹）

大山　市兵衞　（同　）

同國羽島郡竹ヶ鼻町大谷派別院

竹中　傳　六　（割腹）

同國海津郡今尾町常榮寺

黒田　唯右衞門　（割腹）

粒木　稻右衞門　（割腹）

郷田　喜　八　（同　）

姓不詳　市右衞門　（同　）

平山　牧右衞門　（割腹）

第二十四　祭　文

薩摩義士の精神を以て、教養せねばならぬといふ見解の下に、特に鹿兒島縣教育會に於ては、義士の顯彰に努力し、其の學ぶべき尊い薩摩精神の長養に意を用ひて居ります。毎歳其の記念日に當る五月二十五日には城山の麓義士弔魂碑前に盛んなる弔祭をいたして居ります。其の日は市民は勿論、學校各種團體等參拜の人達が、大變多いのであります。

鹿兒島市に於きましては、平常義士の事蹟を調査して、其の顯揚につとめて居りますが又此の記念日には、特に市主催の下に郷土課が中心となつて義士の講演會を開催し、其の尊い精神を益々發揚することに努めて居ります。

私は「今こそ學べ、薩摩義士の精神に」と申しまして此の稿を終りといたします。

尚ほ次の祭文は、我が鹿兒島で擧行されました義士の第一回の祭典の時のものでありまして、大變深い意義がある様に思ひますから、原文のまゝ掲げることにいたしました。

茲ニ本日ヲ以テ壇ヲ鹿兒島ノ中央ナル武殿殿ニ設ケ、聊カ時羞ノ奠ヲ以テ我ガ舊薩藩八十二義士ノ靈ヲ祭ル。顧フニ諸士逝イテ遙々タル星霜茲ニ百六十四年、今始テ諸士ノ靈ヲ錦江ノ上鶴嶺ノ下、諸士ガ夢寐ダモ忘ル、能ハザリシ諸士ノ故山ニ迎ヘ、聊カ報恩ノ誠ヲ表スルヲ得ル所以ハ、固ヨリ聖代ノ恩澤ニ因ルト雖、亦諸士ノ義烈掩ハント欲シテ掩フ能ハザルモノアルニ由ラズンバアラズ。嗚呼精義日月ヲ貫キ、忠烈鬼神ヲ泣カシムルコト諸士ノ如キハ古往今來豈其ノ匹儔多カランヤ。抑々當時幕府ハ天下ノ難工事ナル木曾川治水ヲ我ガ藩ニ命ズ。是レ實ニ我ガ藩死活ノ岐ル、所タリ。藩公之ヲ察シ、上下千人ノ精鋭ニ三十萬ノ資金ヲ授ケテ其ノ事ニ從ハシム。圖ラザリキ諸士ハ多年鍛錬戰場ニ劍ヲ把ル手ヲ以テ今ヤ槌ヲ揮ヒ耒ヲ執ラントハ。物質備ラズ工事馴レズ、隨テ修ムレバ隨テ毀ル。殊ニ費用膨大シ事業未ダ半バナラズシテ、三十萬金ハ既ニ其ノ跡ヲ留メズ、各自責任ヲ負ウテ借銀ニ重ヌルニ借銀ヲ以テス。其ノ額、二百萬金ニ上ル。而モ幕吏ノ監督ハ最モ峻竦ヲ極メ、怒叱要求火ヨリモ急ナリ。熱涙ヲ雙拳ニ揮ウテ武運ノ拙キヲ嘆ジタル諸士ハ、如何ニシテ武士ノ面目ヲ保タンカ、如何ニシテ藩公ニ陳謝センカ夜半燈暗ウシテ電光一閃責任ヲ一死ニ果スモノ前後續出ス。嗚呼何等ノ悲壯ゾヤ、而モ血ハ一切ノ事業ニ生氣ヲ與フ、諸士ガ灑ゲル淋漓タル碧血ハ左シモノ難工事ヲ一年ナラズシテ完了セシメ總奉行平田靱負ハ、最後ニ總責任ヲ負ヒテ自刄セリ。是ニ於テ將軍勞ヲ賞シ藩公榮ヲ荷ヒ、濃尾勢八郡數千町歩ノ田土ハ穰々トシテ黄雲ヲ漲ラセ、百萬ノ生靈ハ鼓腹シテ生業ヲ樂ミ、薩摩工事ノ名千載ニ朽チズ、而モ美名ノ下往々悲慘事ヲ藏ム。薩摩工事ノ裏面ヲ彩レル悲壯ノ背景ハ死者語ラズ生者之ヲ秘シ、最愛ノ妻モ子モ其ノ病死ヲ信ジヌ。孤墳蔓草ニ埋レテ弔祭到ラズ英魂何ヅクニ歸セン、嗚呼世ニ悲壯泣クベキアラバ誰カ先ヅ諸士ノ悲壯ニ泣カザルモノアラン。且ツ夫レ武士ハ名ヲ惜ミテ節ヲ砥グ、而モ諸士ハ名ヲ滅ボシ節ヲ晦マシテ唯ダ一死ヲ擇ベリ。其ノ衷心獨リ責任ヲ重ンジ面目ヲ全ウスルヲ知ルノミ、嗚呼世ニ義烈ノ仰グベキアラバ、誰カ先ヅ諸士ノ義烈ヲ仰ガザルモノアラン。自刄セルモノ五十人、病歿セルモノ三十二人、八十二ノ薩摩義士ハ實ニ皇國武士道ノ精粹ニシテ、豈獨リ薩摩ノ誇リトノ

ミ云ハンヤ。然レドモ金玉ノ土中ニ在ルヤ如何ニ之ヲ埋沒揜蔽スルモ其ノ精氣久クシテ必ズ外ニ發ス。宜ナリ昨冬　聖天子ノ叡鑒ニ入リテ平田總奉行贈位ノ恩典ヲ辱ウセルヤ、吾人不敏耳アルモ聞カズ目アルモ見ザルコト茲ニ久シ。一朝諸士ノ義烈ヲ聞見スルヤ嘆慕欽仰措ク能ハザルモノアリ。乃チ同志ト謀リ、玆ニ本日ノ祭典ヲ設ク、諸士ノ靈希クバ翩然相携ヘテ百二ノ舊藩封ニ格レ、江山ノ美士民ノ情今猶昔ノ如キモノアラン。嗚呼庶クバ享ケヨ

大正六年四月三日

貴族院議員從四位勳四等男爵
鹿兒島市報德會　島津隼彦

薩摩義士の話

終

非賣品

昭和十七年五月二十五日印刷
昭和十七年[illegible]月[illegible]十一日發行

不許複製

薩摩義士の話

編纂兼發行者　鹿兒島市鄉土課
代表者 [illegible] 平川清高

印刷者　中村善太郎
鹿兒島市和泉屋町三六番地

印刷所　鮮明堂印刷株式會社
鹿兒島市和泉屋町三六番地
電話一五九番
振替鹿兒島二八八六番

發行所　鹿兒島市役所
鹿兒島市山下町[illegible]番地

424
279

終